

週刊 学びのコミュニティ

第 63 号

平成 22 年 10 月 20 日発行

海外出張報告 第2弾! -その1-

大橋眞教授、齊藤隆仁准教授、佐藤高則准教授、光永雅子特任助教、仙才守さん（社会人ボランティア）、塩川奈々美さん（総合科学部1年生）が9月4日～9月11日の間、モンゴルへ研究交流や授業開発プロジェクトの提案に行きました。この交流の意義や取組内容について報告いたします。

モンゴル

大草原を渡り歩きながらいまだに遊牧生活をする人が多い。遊牧とは、自然を舞台とした狩猟生活から、人間を中心とした食料採集形態に形を変えたものであり、栽培農業の焼き畑と同様に原始的な農牧畜業である。パプアニューギニアの焼き畑農業と共に自然と共存しながら生きてきた人間の長い歴史を彷彿とさせる。持続可能な社会を実現させるために、人間と自然の関わりを考え直すきっかけとして、良いフィールドである。モンゴルと日本の大学生が交流を深めながら、地域住民を交えながら同じテーマで議論することを実現することが、今後の課題である。（大橋眞）

1st International Conference on Mongoloid Cultures に参加して

9月6日～9月8日にモンゴルのウランバートルで開催されました「1st International Conference



MBI での歓迎の横断幕

on Mongoloid Cultures」とその他の国際交流事業について報告します。この国際会議は、モンゴルビジネス大学 (MBI)、人文大

学、モンゴル健康科学大学と徳島大学との合同で行われました。9月4日（土）午前7時40分 関西空港発の Air China で北京へ、その後ウランバートルへの乗り継ぎ便が4時間遅れたものの、なんとかウランバートルにたどり着きました。現地では、MBI のエンフタイワン学長はじめスタッフの方にお出迎えしていただき、深夜にもかかわらず宿まで送迎していただきました。5日（日）は、民族歴史博



物館などを見学し、6日のMBIでの会議を終えてMBIを訪問、その後エルテネスレン理事長、Eldev-Ochir 教授、人文大学の Purevsuren 教授らと交えて、明日（6日）の会議の打ち合わせを行いました。翌6日の会議は、「Global Trend in Education Development: International Collaboration and Traditional Culture」を主題として、我々の「地域社会人ボランティアを活用した教養教育」の取り組みや MBI や人文大学のモンゴル大学教育への取り組みについて発表が行われました。駐日大使や大臣代理、国会議員などの来賓も来ており、大変な歓迎を受けました。この中では、双方の文化・教育・生活など多角的な面からの報告がなされ、モンゴルではまだ一般的ではない生涯教育という考え方と大

学との関わりについて非常に興味をもっていただいたようでした。今後、モンゴル文科省に申請し、本格的に双方の教育に関する国際協力・交流を始



HSUM での会議を終えて

めたいとのことでした。会議後の懇親会でも、今後の共同研究を進めるためのプロジェクトチーム作成とプログラム企画に関する議論・打ち合わせを行いました。翌7日も郊外のゲルで MBI, 人文大学らスタッフと会議・懇親会を行いました。8日(水)はモンゴル健康科学大学(HSUM)でイチ

ョンホロー教授、ムンクチェチェグ講師などの HSUM スタッフと教育研究プログラム開発に関する合同会議および今後の共同研究計画についての討論・意見交換を行いました。佐藤も極限環境微生物とその酵素の生物資源としての活用について発表を行いました。さらに、モンゴルの国民的飲料である AIRAG(馬乳



Ulziit の elementary school にて

酒)の健康効果や背景となる文化などに関する教育・研究で今後総合科学部と HSUM が協力することになりました。翌9日は郊外にある Ulziit の elementary school、日本人学校を見学しました。その後、現地のゲルで教師らとモンゴルの初等教育事情について意見交換を行いました。この日はさらに、ウランバートルに戻り、国立感染研を見学し、現地での医療現状について説明を受けました。最後の10日(金)は人文大学を訪問し、日本語を学ぶ大学生の授業参観を行った後、MBI の学生との交流会を行いました。一方佐藤らは、HSUM スタッフの案内で AIRAG 製造の見学と研究試料

をいただき、その後イチョンホロー教授らの招待を受け、今後の研究教育の協力展開等について打ち合わせを行いま



人文大学での交流

した。翌11日は北京経由で関空へ帰国。あっという間の一週間でしたが、モンゴルの人たちは大変親切で、見識の広がった充実した国際会議出張となりました。今後も両国の国際交流が進み、双方の教育・研究のプロジェクトが大いに発展することを期待します。(佐藤高則)

私

は今春モンゴルに2ヶ月間滞在し、現地の大学生と、小中学生に日本を教えるというボラン



MBI の教え子と

ティア活動をしました。今回、大橋教授に同行し、約半年ぶりに教え子や学校関係者に再会しました。満足のいく活動はできていなかったにも関わらず、行く先々で暖かくもてなしていただき、感激しました。少なくとも、今後に繋がる活動にはなっていたのだと確認でき、うれしく思いました。昨年末、大橋先生からお誘いを受け、思い切ってモンゴルでの活動に参加、社会人ボランティアとして体験型学習の実践ができました。この種の体験は学生にとっても大変有益だと思いますので、今後、積極的な参加をお勧めします。経済状況の厳しい中、モンゴルの人々は自らの文化に誇りを持ち、明るく暮らしています。同国の今後の発展を願ってやみません。(仙才守)

編集後記

今回『モンゴルへの出張—その1—』をお届けしました。モンゴルへの道筋は、昨年度より続けてきた Skype での交流の成果でもあります。今後、さらに交流を続けて、新しい授業開発プロジェクトへと発展させてくことを目指しています。

学生支援室では毎週モンゴルビジネス大学の学生さんと Skype で交流しています。皆様のご参加、お待ちしております！(光永)